

ことばと旅：異文化コミュニケーションへの 新たな視座を求めて

Language and Travel: Seeking New Perspectives on Intercultural Communication

单	艾 婷	北 原	優
	公立小松大学		九州大学
杉 江	聡 子	小 原	文 衛
	北海学園大学		公立小松大学
星	泉	陳	慶 光
	東京外国語大学		公立小松大学

Abstract: This paper originates from the research symposium “*Language and Travel: Seeking New Perspectives on Intercultural Communication*” held on March 4, 2025, under the JSPS Grant-in-Aid project. It aims to describe concrete case studies across three interconnected domains—*intercultural communication*, *language*, and *travel*—and to explore their commonalities and creative potential. At the symposium, researchers from diverse fields such as Chinese language education, American film studies, Vietnamese archaeology, Tibetan cultural studies, and sports tourism presented their projects related to these three domains. Through comparative discussion of these practices, the symposium reaffirmed that *intercultural communication*, *language*, and *travel* share a fundamental structure of *mobility* and function as creative endeavors that transcend the boundaries of culture, space, language, and media to construct new meanings. This study positions itself as a first step toward fostering the emergence of new academic knowledge through interdisciplinary collaboration centered on *intercultural communication*, *language*, and *travel*.

Keywords: intercultural communication; language; travel; mobility; interdisciplinary collaboration

1. はじめに

本稿は、本学で開催された科研費研究集会における話題提供と意見交換を着想の起点として、「異文化コミュニケーション」と「ことば」と「旅」の関係性、そしてこれらに関する多様な研

究分野の連携可能性についての素描を試みるものである。

まず「異文化コミュニケーション」に関しては、ヒト・モノ・情報の国際的移動が活発化した1960年代から80年代にその認識・分析のための基礎が築かれて以来（Hall 1966, 1976, Bennett 1986, 平野 1984）、そのより有効で実り豊かな実現のための研究が多く分野を横断して進められてきた。日本の高等教育の現場においても、自分のことばで他の国・文化に属する人々とやりとりする一般的能力としての「異文化能力」、および異言語で他の国・文化に属する人々とやりとりする能力としての「異文化間コミュニケーション能力」という異文化コミュニケーションにおける2側面（Byram 1997）の習得を志向する取り組みが、特に新たな社会経済モデルとしての「Society 5.0」概念（内閣府 2025）が提唱され始めた2016年以降に顕著化している。とりわけ言語教育分野においては、言語運用能力育成と背景文化理解促進に同時にアプローチするカリキュラムの構想が、目下、目標言語種を問わず進められている（辻野 2017, 横倉 2022, 徐 2025 など）。

続いて「ことば」に関して、近年の高等教育課程における異言語教育¹⁾では、上記で言及した異文化理解教育との連携のほかにもコミュニカティブ・アプローチ（木戸 2021, 東 2023 など）、行動中心アプローチ（鈴木・大宅 2022, 山本 2025 など）、内容言語統合型学習（植村 2018, 和泉 2024 など）などの多様な教育手法の適用や、マルチモーダル教材（李 2013, 杉江 2023a など）、オンライン学習環境（馮ほか 2021, 柿原・禪野 2022 など）、VR技術（杉江ほか 2020, 小田 2024 など）の導入といった様々な教育工学的改良が、第一外国語としての英語のほか、中国語やドイツ語といった第二外国語の教育実践の場においても試みられている。また海外の国や地域の言語文化との接触機会も、2010年代以降、増加傾向にあり、明治時代から続く欧米圏の著作物を対象とした翻訳（新熊 2008 など）のみならず、韓流ドラマ・K-POP人気から発展した韓国文学（K-BOOK 振興会 2025 など）への注目を皮切りに、中国語圏文学（泉 2017 など）、チベット文学（NAO 2024 など）、東南アジア文学（日本語パートナーズ事業部 2021 など）など、アジア圏の言語文化についても受容可能な読書・市場環境が整備されつつある。

最後に「旅」、とりわけ観光に関しては、「モビリティーズ」概念（Urry 1990, 2007）が提出された1990-2000年代を起点として、その経済的側面から文化的側面、哲学的側面までの多岐にわたる観点から議論が重ねられてきた。観光の本質のひとつは、家〈ホーム〉から離れた場所への移動であり、それは自らが慣れ親しんだ空間から見慣れぬ空間に移動することを意味する（Graburn 1977 など）。そして観光経験は、ホームから離れた空間に存在するであろうオーセンティシティの追求と、観光産業によって仕掛けられた疑似イベントの消費との間を揺れ動く体験である（MacCannell 1976, 山中 1992 など）。このような観光経験の諸現象を記述する方法論のひとつとして観光人類学的手法（山下 1996 など）があり、より実務的には、旅先で使用する言語や文化に精通した「観光を支援する人材」を育てる観光教育（寺本・澤 2016 など）がある。

以上の3つの概念、そしてその関連分野は上記で述べた通り多くの共通性を有し、実際に多くの連携や協働が試みられ、その多くの成果が報告されてきた。しかしそれらには未だ多くの課題

が存在するとともに、さらなる発展可能性を秘めている。

2. 「問い」の起点：異言語学習と旅行経験の共通性とは何か？

本稿筆者のひとりである単艾婷は、2020年度より「読書活動とコミュニケーション活動の統合による新たな中国語教授法の構築」をテーマに、新たな中国語授業のかたちを考えることを目的とした基礎研究と授業実践に取り組んできた。これらの取り組みは、実践的な問題解決力、論理的思考力、コミュニケーション能力などの汎用的技能の養成という現代日本における教育需要を押さえつつ、現行の外国語教育、特に中国語教育にしばしば見られる過度な実用主義への傾斜も是正したいという問題意識に基づくものである。2021年度からこの教育研究の第一歩として、中国の“90后文学”（雷 2010 など）を題材とした中国語教科書を設計・出版し（単 2022）、中級クラスにおける授業実践とその教育効果評価を行った（単 2024）。そしてこの授業実践の拡張を目的として、対象とするオーセンティックテキストのジャンルを物語文から説明文に換え、旅行ガイドブックを題材とした教科書を設計・出版した（単 2025）。同教科書を使用した授業実践は、現在も継続中である。なお、教科書設計と授業実践の詳細は、本紀要掲載の別稿を参照されたい。

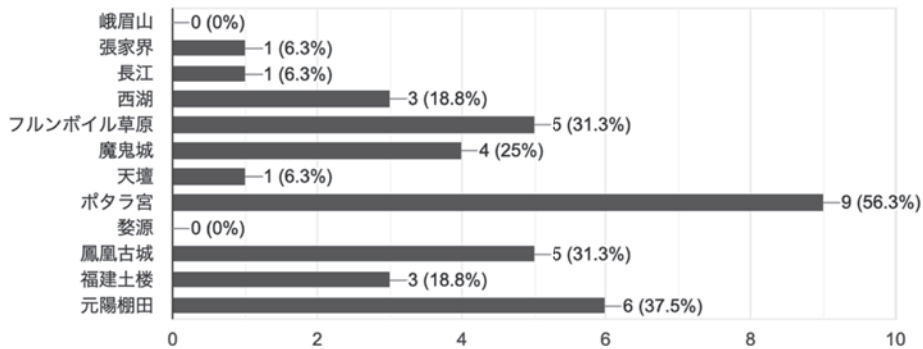


図1 学習者にとって特に印象に残った場所（横軸は人数、各人複数回答可）

同教科書を使用した授業を行う中で、学習者から「一般的な授業では扱わないリアルな中国を感じることができた」「紹介されていた観光地が初めて知る場所ばかりであったため、楽しく中国語学習ができた」という声が聞かれた²⁾。また、授業後に実施した「12課で扱った場所のうち、特に印象に残った場所はどこか？」という質問紙調査では、チベット自治区（ポタラ宮）、内モンゴル自治区（フルンボイル草原）、雲南省（元陽棚田）など、地方や少数民族の文化圏の人気の高いという結果が得られた（図1）。このことは、学習者自身に馴染みのない、未知の異文化空間への興味が、言語学習のひとつの動機付けとして一定程度有効に作用したことを示唆している。教授者自身も、この教育カリキュラムの設計に取り組んだり、授業中に学習者とコミュニケーションを図ったりする中で、北京や上海など既存の中国語教科書で取り上げられることの多い大都市

とは異なる、江西省（婺源）や福建省（福建土楼）といった地方の文化や、少数民族集住地域の文化に特有の個性や面白さに気付いたほか、自分自身の故郷の文化や言語（方言）に対するアイデンティティを再認識する良い機会となった。

また、教授者は上記の授業実践のほかに、本学において中国語研修プログラム（短期留学）の引率も担当している。2024年度のプログラムに参加した学生の提出レポートには、「留学を通して自分が中国に対して偏見を持っていたことに気付かされた」「留学先で出会った中国人たちは、私がこれまで中国人に対して抱いていた印象とまるで違っていった」「異文化の中での生活は、日本での生活、自分自身の性格や言動などを見つめ直すきっかけになった」「文化や習慣が日本と異なる状況に置かれたことで、とりあえず何でもやってみようという考え方になった」などの記述が見られた。学生たちは中国への「旅」を通して、偏見の克服や自分化の再認識、主体性の獲得などを実現させたと言える。

上記に示したような教育実践を通して、「知らない言語を学ぶこと」と「知らない場所を訪れること」の相互関係に対して強く興味を抱くようになった。そして、それに関する多角的な再考を目的として、次節以降の研究集会を本学で開催した。

3. 研究集会概要



図2 研究集会の様子（2025年3月4日、本学にて）

当該研究集会は2025年3月4日、本学中央キャンパスにおいて、対面とZoomを併用したハイブリッド形式で開催された。本研究集会は上述の通り、言語教育、観光研究、文化研究、フィールドワーク、メディア分析など多様な視点から「ことば」と「旅」と「異文化コミュニケーション」の関係性と創造性について考え、新たな視点やアイデアを見つける第一歩とすることを目的とするものである（附録）。本研究集会の企画・運営は本学の単艾婷（研究分野：中国語教育・テキスト言語学）によるものであり、北海学園大学の杉江聡子（中国語教育・観光教育、スペシ

ャルゲスト)、東京外国語大学の星泉(記述言語学・チベット文学、スペシャルゲスト)、当時高知大学所属の北原優(ベトナム考古学・地球科学)、本学の小原文衛(アメリカ映画・英米圏文学)と陳慶光(スポーツツーリズム)が参加し、話題提供と意見交換を行った(図2)。5名の研究者による学際的な視点からの話題提供内容を、研究集会当日の報告順から体系的に再構成したうえで以下に記載する。

4. 「問い」の拡張：5つの異なる視点から

4-1. 視点① 移動をめぐる表象：自己の領域から他者の領域へ

報告テーマ「Go West：ホラー映画とアメリカの歴史」(報告者：小原)

本報告はゾンビ映画の物語構造、特に移動をめぐる表象をおもな視点として、アメリカ合衆国の地理空間の特性と西漸運動の歴史を読み解く試みである。この理論的基礎は、小原(2016)並びに小原(2020)等を参照されたい。

本報告のテーマである「ゾンビ」(Zombies)―すなわち死者が蘇り、群れになって人を襲い、食べ、噛まれた人もまた〈それ〉になる存在―このようなゾンビの類型はアメリカ合衆国の映画監督、ジョージ・A・ロメロの発明によるものであり、「モダン・ゾンビ」と呼ばれる。モダン・ゾンビ像は、ロメロによるゾンビ三部作(Dead Trilogy)、すなわち1968年の『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』、1978年の『ゾンビ』、1985年の『死霊のえじき』によって創造された。この三部作では、年代順にその舞台の規模が拡大・膨張していく。第一作では田舎町の一軒家を舞台とした生存者とゾンビの攻防が、第二作ではアメリカ全土に広がったゾンビパンデミックが、第三作では人間1人に対するゾンビ40万體という世界規模でのポストアポカリプス的なディストピアが描かれるというように。そして野原(2010)が指摘し、ロメロ自身もインタビューで答えているように、ゾンビ映画というテキストの「お約束」は〈立て籠もること〉である。

〈籠城〉という物語構造は、西部劇の「お約束」でもある。すなわち物語のパターンとして西部劇とゾンビ映画は似ている。作品『ゾンビ』の主役はSWAT隊員で紺色の戦闘服を着て戦うのだが、この紺色という色は、西部劇における合衆国軍騎兵隊の制服と共通している。要するに、ロメロのゾンビ映画におけるゾンビとは、アメリカ先住民を無意識的なレベルで表象するものなのだ。

アメリカ合衆国の歴史は1776年の独立宣言をもってフィラデルフィアから始まる。そして1890年にかけて「明白なる運命」(Manifest Destiny)の理念のもと、文明化に基づく西部領土の拡張―現実にはインディアンの土地征服と虐殺―が実行される。ここで地図上において、西漸運動同時に建設された25000人以上50000人以下の人口を擁する都市が年代ごとに発展していく様子と『ゾンビ』において主人公たちがヘリコプターで移動した地域を比較してみると、この両者は見事に重なるのである(図3)。そして主人公たちの脱出劇の起点がフィラデルフィアであることも重要だ。テキスト『ゾンビ』には内的膨張主義の動きの反響のようなものを見て取ることがで

きる。ゾンビを殺戮しながら西へ、さらに西へ。Go West。つまりインディアンを殺戮しながらの西漸運動である。このように見ていくと、アメリカ合衆国外（南の島）への逃亡という『死霊のえじき』終幕の舞台設定は、アメリカ合衆国の海洋帝国化を表象するものとして大きな意味を持つてくるのである。

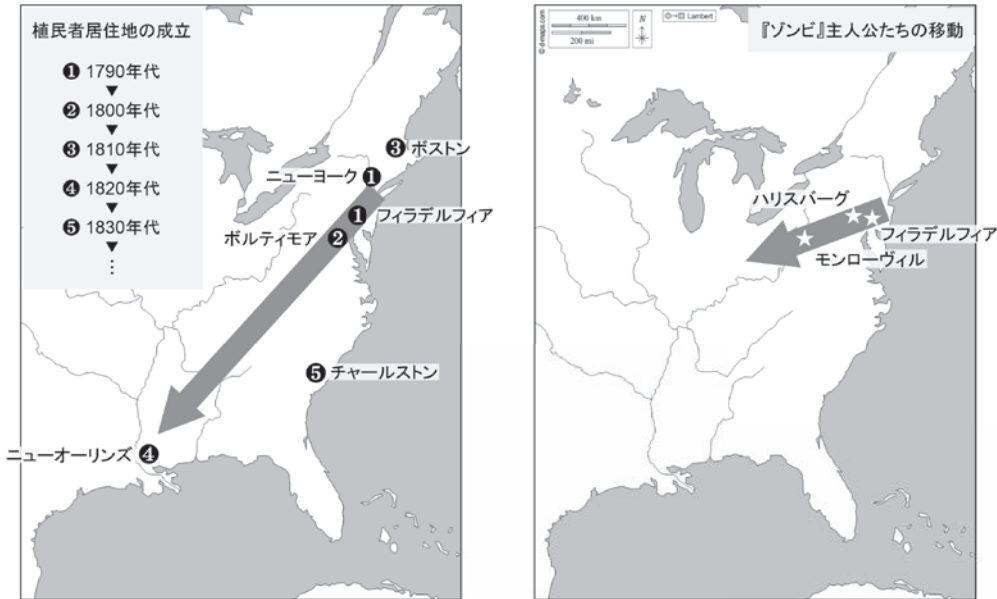


図3 西漸運動当時の植民者居住地と『ゾンビ』における主人公の移動の対応

ロメロは作品群の中で、果たして意識的に西漸運動に言及していたのであろうか。報告者の経験と理論から言うならば、映画というテキストそのものが作者の意図を離れて〈何か〉を語ってしまうということは十分にあり得るのだ。このような現象を Stewart (2007) は「光学的／視覚的言及」(Optical Allusion)と呼んでいる。映画の表層に現れる移動＝旅は、その映画が作られた文化・社会のコアにある何らかの移動＝旅の表象であるということもできる。このように、特定の文化のもと特定の言語で表現された映画というテキストを丁寧に読み解くことによって、その土地のこと、そこに成立する人々の歴史、そして彼らの自他認識について追ってゆくことができるのである。

4-2. 視点② 他者の文化空間へ参与することによって何を学び取れるか？

報告テーマ「ゼロ初級者のベトナム経験：専門知の翻訳・融合・ローカル化」(報告者：北原)

本報告は、報告者自身の簡易的なオートエスノグラフィーとして、ベトナムにおける学術交流を通じた異文化コミュニケーションの様相、およびその試行錯誤の過程を記述するものである。

報告者は、大学院まで「古地磁気・岩石磁気学」という地球科学の一分野（Kitahara et al. 2021, 北原 2022 など）を専攻していた。その後、2020 年頃からベトナム考古学（チャン・重枝 1997 など）の勉強を始め、コロナ禍が沈静化した 2022 年からベトナム現地に赴き、現地の研究者たちと一緒に上記分野の分析技術を考古学に応用するための研究に取り組んでいる。当初、報告者は自身が学んだ日本や欧米由来の知識をベトナムに「伝える」のだと意気込んでいたが、現地で活動を始めてすぐに、この認識が大間違いで、極めて浅はかだったと気付いた。2025 年現在でさえ、報告者は言語運用能力、ローカルな考古学に関する専門知識、現地文化の理解度のいずれにおいても「初級者」なのだ。

当地の国語はベトナム語であるから、空港に降り立った時点から、このオーセンティックな日常会話の海の中に放り込まれることになる。コミュニケーション形態は口頭言語だけではない。ベトナムは、日本と同様に母語による読書文化が深く根付いた文化圏である。各地方の市街地に展開する書店チェーン「Nhà Sách Phương Nam」（南部書店）の店頭には、ベトナム人作家たちによる最新の著作が所狭しと並んでいる。学術媒体に関しても同様である。考古学に関しては、ハノイ市の考古学院が『Tập chí Khảo cổ học』（考古学雑誌）という優れた専門誌を年数回のペースで発行している。当地では英語の雑誌も刊行されている。しかしフィールドワークでの実感として、より高度かつ体系的な議論に加わるには、ベトナム語での学術コミュニケーションに参加することが必須である。

報告者は、ベトナム考古学研究者としては「見習い」である。しかし、2024 年秋に「世界文化遺産ミーソン遺跡 25 周年記念シンポジウム」の紀要集への寄稿を依頼されたため、自身の研究紹介のエッセイをベトナム人共同研究者と執筆した。これを自身のベトナム語学習にフィードバックするため、同原稿（総文数=125）に対するテキストマイニングを実施した。結果、延べ形態素数 = 3157、異なり形態素数 = 946 であった（図 4）。ここで大事なのが、延べ形態素数の 50% を占める 77 の形態素だ。これはフィールドワークで自身の仕事を一人前にこなすにあたって「最初に暗記すべき必須語彙」である。ここには基本語彙のほか、“di tích”（遺跡）“từ tính”（磁性）のような専門用語や、“sự ~”（～こと）“~ mà …”（～だけれども…）のような機能語も含まれる。これらは一般的に、市販の「入門書」では扱われない語彙だ。

ローカルな学術実践にあたっては、語彙・文法の翻訳だけでは不十分である。先述した古地磁気・岩石磁気学の考古学分野への応用には、①考古地磁気学、②考古岩石磁気学、③環境磁気学という 3 つの下位領域が存在し、日本では①→②→③という流れで研究が発展したが、ベトナムでは真逆である。従って、日本での実践と同じようにベトナムで応用したのでは、学術的なコンテキストと齟齬を起こしてしまう。Livingstone (2003) は、科学という営みは普遍的なものではなく、各地の地理的・歴史的条件の影響を多大に受けているものだと述べている。その土地の「気風」を読み解き、その土地固有の「知」と自身が〈持ち得るもの〉を融合させながら、「知」のローカル化を目指すことが何よりも重要なのだ。

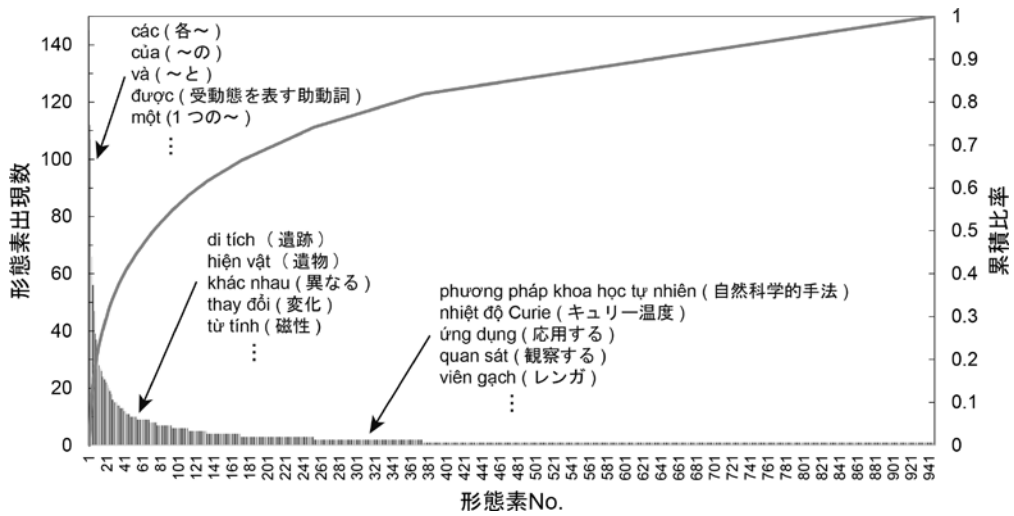


図4 ベトナム語原稿に対するテキストマイニング（頻度分析）の結果

4-3. 視点③ 他者の文化を体系的に記録し、自己の文化へと還元するための方法論

報告テーマ「語りの記録を通じてチベットを経験する：翻訳とフィールドアーカイビングの試み」
（報告者：星）

本報告は、チベット語やチベット文化をめぐる報告者自身の「旅」の現在地を描写し、その手掛かりとしての活動「フィールドアーカイビング」の方法論と現在までの成果を紹介するものである。報告者は、もともと大学院でチベット語ラサ方言や古典チベット語の研究をしていたが、これらは基本的に個人研究であり若干方向性を見失っていた。研究者としての報告者に転機が訪れたのは2010-2011年。1つ目は職場である東京外国語大学でのアムド・チベット語研修に参加した際に牧畜民出身の講師の先生に出会い、それまで自身が都会の言葉や文化しか知らなかったことに気付いたこと、2つ目はチベット映画の字幕翻訳監修の依頼を受けたことで、従来の専門とはまったく異なる映画や文学の世界に足を踏み入れたことである。このような経緯で、チベットの牧畜文化研究や現代文芸作品の翻訳、チベット文化のアウトリーチ活動に取り組み始めた。この三分野の活動は一見ばらばらに見えるが一貫しており、相乗効果を生み出している。特に牧畜文化研究に関しては、文系と理系の多様な分野の専門家からなる学際的な共同研究体制を構築するところから開始した。

上記の学際・国際共同研究を駆動する主たる活動が「フィールドアーカイビング」である。報告者らはフィールドアーカイビングについて「フィールド調査の過程で得られた語り・映像・写真・音声・文学作品など多岐にわたる情報を有機的に結びつけた形でアーカイブすることによって当該地域で継承されてきた文化を再現的に活写するための活動」と定義している（星ほか2022：S198）。同活動の過程はフィールドワーク（F）、ドキュメンテーション（D）、アーカイビング

(A)、キュレーション(C)の有機的統合からなる「FDACサイクル」に基づくものである(図5)。

この代表的な共同研究は、中国青海省黄南チベット族自治州ツェコ県の牧畜専業地域において、2014年から2019年までの6年間実施された。背景には、生業は文化の基層をなすものであり、失われゆく牧畜文化にまつわる記憶を記録するなら「今」しかないという問題意識があった。具体的なフィールドアーカイビングの方法は、まずデータベースを意識した記録票を用意し、調査日の夜に整理と個人のフィールドノートからの転記・追記を異分野協働で行い、帰国後にデータベースに入力するというものである。現地で撮影した写真や、同行したイラストレーターがその場で描いたイラストなどもID付きで登録するのである(星ほか2021)。このFDACサイクルも当初は順調には進まなかった。あるとき調査を行っていた際、インフォーマントが呆れ果てて、後から苦情が入ったことがあった。この原因は、語彙ベースかつ「これは何か?」のように要素を細かく区切った質問票にあった。これを「語りを記録する」という方向に転換したところ、非常に良い効果が得られた。得意なことを自由に話してもらうと、語りながら色んな話がどんどん出てくるのである。

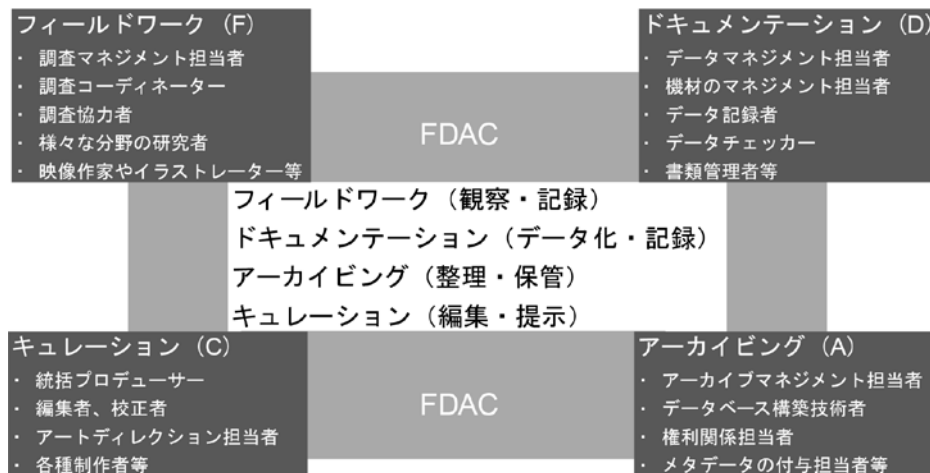


図5 フィールドアーカイビング (FDAC サイクル) の各段階と関係者

上記のような試行錯誤を経て、2020年に「チベット牧畜文化ポータル」をWeb公開することができた(星ほか2020)。さらに調査中に得られた民俗誌を冊子『SERNYA』³⁾に掲載するなどのアウトリーチ活動を行ったほか、この共同研究中に新たな文学作品が誕生したりもした(ラシヤムジャ「最後の羊飼い」)。これらの活動には、専門分野からずれていく旅の不安と面白さがあり、様々な専門家との共同研究という形での「連れのいる旅」の苦労と楽しみもあった。そして、様々な困難からフィールドアーカイビングの手法が編み出された。今後も言語と文化と旅の経験を統合する本手法をさらに洗練させ、様々な人々と共有していきたい。

4-4. 視点④ 未知の言語と他者の世界をバーチャル空間で体験する

報告テーマ「バーチャルトラベルを通じて旅行体験を共創する中国語教育のデザイン」

(報告者：杉江)

本報告は、メタバースやVRといったバーチャルな世界での旅行体験を核とした中国語教育環境のデザインについて紹介するとともに、言語教育と観光教育の接続について提言するものである。この理論的基礎は、杉江（2023b）並びに Sugie（2024）等を参照されたい。

本報告の背景として、まず日本の若者が「旅」や「移動」、「非日常体験」を通じてどのように中国語を使用するか、ゲストの視線とホストの視線（山下 2011）の双方から考えてみたい。端的に言えば、前者としての使用機会は海外旅行、留学、中華料理店、買物などであり、後者については訪日観光客のおもてなし、アルバイト先での接客・同僚との協働、移民や留学生のクラスメートとの活動などである。このような旅・移動・非日常体験におけるコミュニケーションと関連する観光教育は、観光専門人材の育成を目指す「観光実務教育」と、おもてなしや観光施策、観光が地域へ与える影響等に関して受入観光地のホストとしての立場から理解を目指す「観光基礎教育」に区分される。とりわけ後者に関しては、外国語教育・学習との相性が良さそうだと考えられる。

日本の10-20代の若者たちは「メタバースネイティブ」であり、その多くは『あつまれどうぶつ森』や『フォートナイト』といったオンラインゲームを体験して育ってきた。すなわち彼らにとっては「リアル×バーチャル=ハイブリッド」が日常的に自然で、当たり前のコミュニケーション形態だということである。報告者は、観光も教育も「ハイブリッドな場」へと変化しつつあるのだと感じている。これらのことを背景として、報告者は現在、メタバース・VR（武井 2022, 雨宮 2022 など）を活用したバーチャルトラベルによる観光経験を通じた中国語練習をメインテーマとする教育研究に取り組んでいる。

「中国語×バーチャルトラベル」の授業は、(i) 教科書学習→(ii) 音声認識による発音練習→(iii) ワークシートを使用した応用練習→(iv) VRタスクの4ステップで設計された。VRタスクの開発に際しては、現実を完全に再現する必要はないことや、現実にはない世界の創造の面白さを活かすことなどに留意した。VR空間の構築には、Webブラウザ・アプリ型のメタバースプラットフォーム「Spatial」を利用した（図6）。VRタスク「世界旅行&思い出発表」において学習者は、①自分が行きたい国や地域を決め、②行き先が同じ仲間（旅友 タビトモ）でチームを作り、③VR上で各地を巡って記念写真を撮影し、④写真をギャラリーに展示して旅の思い出を中国語で発表し、⑤別チームの発表に対して中国語で感想や質問を述べるという一連の授業内活動を体験する。同タスクは、“要”“想”などの希望表現、“一起～吧”などの勧誘表現、“了”“过”を用いた完了・経験表現といった事前学習した語彙・文法を効果的に実践活用できるように設計されている。このような授業実践を勤務校の3クラス（各11名、14名、20名；人文学系9割、工学系数名）で実践した。

オンライン上での質問紙調査（n=42）の結果からは、学習者が本授業を楽しんでいると感じ、中国語学習のモチベーション向上に繋がっていること、実際に中国語の使用機会が増えるとともにアウトプットの機会が充実したこと、グループワークを通じたコミュニケーションの活性化により学習の質が向上したことが伺えた。今後もメタバースやVRなどを活用した授業実践を重ねることにより、「旅」や「観光」におけるフィールド・表現手法の拡張、言語教育と観光教育の有機的連携、そして、それらのハイブリッド化に繋げていきたい。



図6 Spatial上に構築された授業タスク「世界旅行&思い出発表」のVR空間

4-5. 視点⑤ バーチャル空間は異文化コミュニケーションの可能性をいかに拡張するか？

報告テーマ「コロナ禍によるスポーツツーリズムの変化：SNSデータを用いた分析」

（報告者：陳）

本報告は、コロナ禍を契機としたスポーツツーリズムの変容と発展、並びにオンラインマラソンを媒介としたSNS上での人々のコミュニケーションの様相について分析するものである。なお本報告は陳（2023）に基づくものであり、この理論的基礎は、陳（2022）等を参照されたい。

本報告のテーマである「スポーツツーリズム」は、スポーツ競技を単純に実践するのみならず、文化や観光と融合することによって、幅広いフィールドを形成するものである（日本スポーツツーリズム推進機構 2022 など）。スポーツツーリズムは①「する」、②「みる」、③「ささえる」という3要素から構成される。コロナ禍以降、この様相はリアル空間における実施から、ICT技術を活用した新たな様式へとシフトしてきた。①はオンラインマラソン大会やバーチャルライド、②は「投げ銭」システムによる応援やVRを利用した試合視聴、③はボランティアのオンライン講習会の実施といったように。スポーツツーリズムにおけるリアルとバーチャルの最大の相違点は時間と空間の縛りである。例えば、オンラインマラソン大会において参加者は、GPS計測ができるスマホアプリやランニングウォッチを使用して走行距離とタイムを計っている（図7）。では

実際のオンラインマラソン大会において、参加者は「どのように走っていた」のであろうか。以下では京都マラソン開催時における SNS 上での参加者の投稿を分析データとして、ネットグラフファイ（薬師寺 2022 など）の手法を用い、バーチャルをリアルに近づかせる工夫を観察してみたい。



図7 スマートフォンアプリ上での表示画面（陳 2023 の図に一部追加）

SNS 上での参加者たちのコミュニケーションにおいて観察された工夫の多くは、ランナー自身によるコース設定とランナー自身の想像力に基づくものである。前者では、規定コースにはない「普段走らない場所に行ける」といった効果があり、後者は「京都に思いを寄せながら地元の道を走る」といった実践である。ここではリアルとバーチャルの「反転」や「結合」が生じている。非リアルと思われる地元のランニングコースは、そこにランナーの想像力が加わることによって瞬時にリアルへと反転するのである。参加賞としてリアル大会同様のメダルを贈呈するといった主催者側による仕掛けもまた、バーチャルをリアルに近づけることに寄与したと言えるだろう。その一方、GPS による走行距離計測の特性上、多くの大会において自転車車で走ってタイムを稼いだり、他人のスマホを利用して完走記録を取得したりするなどの事例が見られ、マラソンランナーとしての価値あるアイデンティティを維持する難しさも浮き彫りとなった。しかし、そのような困難さのもとであっても、オンラインのランナーたちはリアル空間で仲間と一緒に走ったり、バーチャル空間（LINE グループなどの SNS）で自分の走りを仲間と共有したりすることを通して「I am a runner!」というアイデンティティを維持していたのである。

リアルとバーチャルは明確な線引きによって区切られる二項対立ではなく、相互に影響し合う有機体として捉えるべきなのだ。加えて上記で紹介したようなオンラインスポーツイベントにおいては、多様なリアル空間にいる人々のみならず、多様な母語や文化を背景とする人々が一堂に会し、コミュニケーションが図られていることも見逃せない。京都マラソンのようなオンライン大会はコロナ禍終息後も継続している。オンラインスポーツイベントは新たな役割を担うコミュニケーションの一形態として、これからも続いていくことだろう。

5. 考察

本節では、本研究集会の主題である「異文化コミュニケーション」「旅」「複言語コミュニケーション（異言語学習を含む）」に通底する共通構造を明確化し、これらを通じた将来的な異分野連携の可能性について考察する。上記の3領域はいずれも〈自己〉と〈他者〉、〈ホーム〉と〈非ホーム〉、〈リアル〉と〈バーチャル〉の境界を往還する実践であり、その基層には「モビリティ mobility = 移動性」(Urry 2007) という共通構造が存在すると考えられる。本節ではまず、6人の筆者による各実践の類型化を行い、続いて各実践に含まれる行為の要素を整理し、最後に「モビリティ」が上記3領域を中心とする学術研究において果たす創造的意義について議論する。

本稿3節および4節にて報告した6つの実践は、実践者の位置と空間特性に焦点を当てる場合、大きく以下の3グループに類型化可能である。

- (I) 実践者が〈ホーム〉に位置しながら、異文化に属するテキストと対話する実践（単・小原による実践）
- (II) 〈ホーム〉を離れて他者の文化空間へと赴き、異文化に属する人々と交流する実践（北原・星による実践）
- (III) 創造されたバーチャル空間に参加して多様な人々と交流するとともに、バーチャル空間とリアル空間を往還する実践（杉江・陳による実践）

これら3グループの実践は一見異なる方向性を持つように見えるものの、いずれも「モビリティ」を核としており、文化・空間・言語・メディアの境界を越えて新たな意味構築が行われる点で共通している（図8）。換言すれば、これらの実践はすべて、ある点aから異なる点bへの「転地」（displacement：Cresswell 2006）ベクトル（ $a \rightarrow b$ ）を基礎的な構造とする創造性の多様な具現形式である。これら $a \rightarrow b$ を基礎的な構造とするモビリティの創造的側面に関して、根岸（2025：34-35）は Hannam et al.（2006）による言及を踏まえつつ、移動性は「一般に、抽象的、機能的、または道具的なものとして看過されがちだが、その経験は人びとの感覚や世界観に重要な意味をもたらし、多元的な意味世界や多種多様な主体性をつくりだす」ものであると総括している。本研究集会の主題である「異文化コミュニケーション」と「ことば」と「旅」、すなわち文化・空間・言語・メディアの境界の越境行為は、多様な側面を有する現象であり、本稿1節にて概観した通り、多くの分野にて様々な研究が重ねられてきた。しかしながら各専門分野での知識産出プ

ロセスにおいては、その産出の際に問題となる暗黙の前提条件や、研究業績の承認形式などが各分野の共同体ごとに異なっているがゆえに（藤垣 1995）、換言すれば、専門分野ごとにその「関心相関性」が異なるがゆえに（西條 2005）、分野を超えた議論がこれまで十分に行われてこなかった。実際のところ、6名の本稿筆者ら — 研究領域も、主要な興味関心も異なる研究者たち — の知識を一元的に統合したプラットフォームの構築などは、研究分野ごとのアプローチの差異から見ても、所属する研究機関の組織構造の差異から見ても難しい。しかし、モビリティという共通構造は、分野・組織間の差異を超えて、各人の経験を共有するひとつの手掛かりとなり得るのではないだろうか。そして同時に、各領域から得られた知見を繋ぎ、異分野連携による新たな学術知の創発を促すものであると言えるだろう。

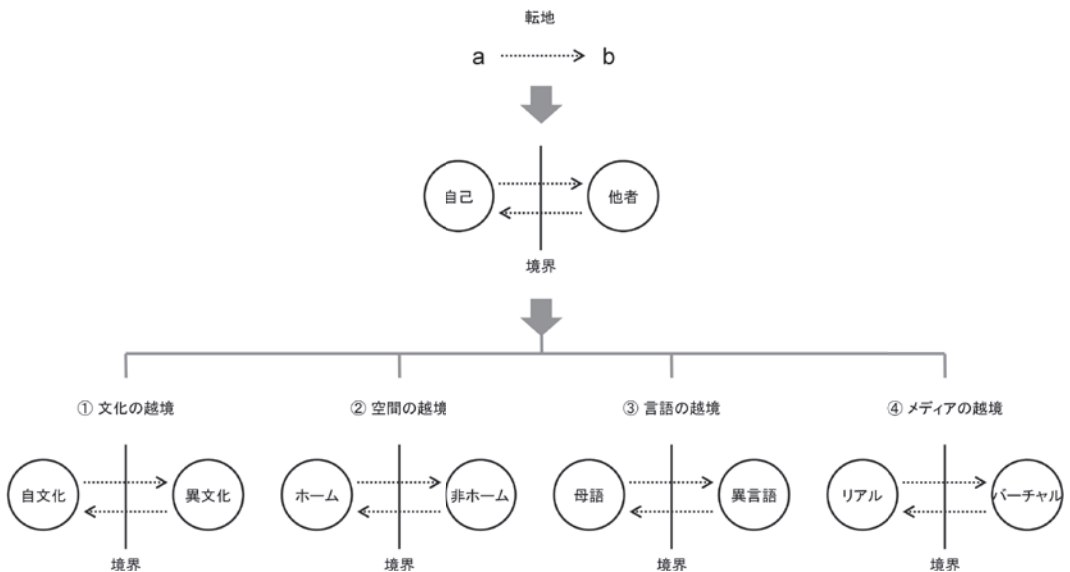


図8 モビリティ（転地 a→b）を核とする4つの意味構築過程

ここまでの考察を総合すると「異文化コミュニケーション」「ことば」「旅」という3領域は、モビリティを共通構造とする創造性の多様な具現形式であると再定義できる。ここでのモビリティは、単純な場所的な移動のみならず、「自己⇄他者」「ホーム⇄非ホーム」「母語⇄異言語」「リアル⇄バーチャル」といった複数の境界を往還しながら新たな意味世界を構築する過程である。このような越境行為を通して、他者理解への手掛かりが得られると同時に、自己認識の在りようも変容する。従ってモビリティは、自己と他者の関係性を解きほぐし、改めて結び直すためのひとつの重要な視点であるとともに、専門分野を超えた連携や協働のための共通言語となり得るものである。今後は上記の視点を起点として、異分野連携の在り方をいかに具体化させていけるかということが課題となるだろう。

6. おわりに

本稿では、2025年3月4日に開催された科研費研究集会を契機として、異なる分野・領域を専門とする6名の筆者による実践報告から「異文化コミュニケーション」と「ことば」と「旅」の実像を記述し、それらの共通性や創造性について考察した。この中で、単は旅行ガイドブックを題材とした中国語教育の実践、そして読書活動とコミュニケーション活動の統合による新たな中国語教授法の構築に関するアイデアを、小原はゾンビ映画の物語構造、特に移動をめぐる表象をおもな視点としたアメリカ合衆国の地理空間の特性と西漸運動の歴史を読み解く試みを、北原は自身の簡易的なオートエスノグラフィーとして、ベトナムにおける学術交流を通じた異文化コミュニケーションの様相とその試行錯誤の過程を、星はチベット語やチベット文化をめぐる報告者自身の「旅」の現在地、そしてその手掛かりとしての「フィールドアーカイビング」の方法論と現在までの成果を、杉江はメタバースやVRといったバーチャルな世界での旅行体験を核とした中国語教育環境のデザイン、そして言語教育と観光教育の接続についての研究成果を、陳はコロナ禍を契機としたスポーツツーリズムの変容と発展、そしてオンラインマラソンを媒介としたSNS上での人々のコミュニケーションの様相について報告した。

上記の実践報告を通して、「異文化コミュニケーション」「ことば」「旅」という3領域にはモビリティという共通の基層構造が存在することが再確認された。そして、その主体に着目しつつ換言すれば、上記3領域での実践は、〈自己〉が〈他者〉の空間へ移動し、異文化に属する経験を通して〈自己〉を再定位する往還的構造の具現化の事例である。そして、このモビリティという共通構造は、分野・組織間の差異を超えて、各人の経験を共有するひとつの手掛かりになり得る。本研究集会での話題提供と意見交換を通して得られた知見は、上記3領域に関連する新たな共創の可能性を拓く第一歩となるだろう。

注

- 1) 「外国語」という語を使用するとき、本稿でも話題に上がっている「アムド・チベット語」や「中国語の方言」のような特定の国家の国語でない言語を、その範疇から無意識的に除外してしまうことが考えられる。そのため本稿では「外国語教育/学習」という術語を使用せず、代わりに「異言語教育/学習」(大谷 2013 など)を使用する。
- 2) ここに記載した学習者のコメントは、文意はそのままに言語表現を微修正している。
- 3) この詳細は、SERNYA 編集部『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA セルニャ』
<https://tibetanliterature.blogspot.com/p/sernya.html> (2025.10.01 閲覧) を参照されたい。

参考文献

東淳一 (2023) 「コミュニケーション・アプローチの存立意義を問う」『神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要』8, 1-18.

- 雨宮智浩（監修）（2022）『メタバースでできる 100 のこと』宝島社.
- 李相穆（2013）「韓国語教育におけるマルチメディアの活用」『言語科学』48, 43-48.
- 泉京鹿（2017）「翻訳家が語る、魅力ある中国文学の世界」『国際善隣協会 公開講演会記録』17-24, <https://www.kokusaizenrin.com/2017/izumi.pdf>
- 和泉伸一（編著）（2024）『実践例に学ぶ！—CLIL で広がる英語授業』大修館書店.
- 植村麻紀子（2018）「中国語教育における CLIL 活用の可能性—“中国留守児童”を題材に」『中国語教育』16, 147-167.
- 大谷泰照（2013）『異言語教育展望—昭和から平成へ』くろしお出版.
- 小田理代（2024）「外国語学習における AR と VR の活用に向けた先行研究の動向—諸外国と日本の研究から」『麗澤大学紀要』107, 11-22.
- 柿原武史・禪野美帆（2022）「大学の言語教育における オンライン遠隔授業の経験と今後の可能性—スペイン語教育のコロナ禍への対応から考える」『商学論究』70（1/2）, 689-707.
- 北原優（2022）「古地磁気強度測定法と文化財の年代決定」亀田修一・白石純（編著）『講座考古学と関連科学』雄山閣, 132-136.
- 木戸紗織（2021）「ドイツ語学習の射程と大学教育—コミュニケーション能力・母語・社会的タスク・自律的な学習」『東北医科薬科大学教養教育関係論集』34, 1-20.
- K-BOOK 振興会『日本語で読める韓国の本』<https://k-book.org/category/yomeru/>（2025.09.27 閲覧）
- 小原文衛（2016）「ゾンビの詩学：〈追跡〉と〈籠城〉のモチーフについて」『Ivy』49, 67-88.
- 小原文衛（2020）「ジョージ・A・ロメロの映画制作と作品についての研究—〈西部劇のパラダイム〉の導入による『デッド・トリロジー』の新たな歴史的サブテキストの解明」金沢大学博士論文.
- 西條剛央（2005）「質的研究論文執筆の一般技法—関心相関的構成法」『質的心理学研究』4(1), 186-200.
- 徐璐（2025）「初級中国語授業における文化的要素の導入—異文化コミュニケーションの深化を目指して」『福知山公立大学研究紀要』9(1), 131-140.
- 新熊清（2008）『翻訳文学のあゆみ—イソップからシェイクスピアまで』世界思想社.
- 杉江聡子（2023a）「ウィズコロナ・アフターコロナの中国語教育—外国語×ICT×専門教育でマルチモーダルなコミュニケーションスキルを伸ばす」『中国21』58, 105-124.
- 杉江聡子（2023b）「観光・メディア・外国語教育を統合したPBLの教授設計」『複言語・多言語教育研究』11, 62-77.
- 杉江聡子・楊彩虹・清水賢一郎・田邊鉄（2020）「国際世代間協同学習による多言語 VR キャンパスガイド開発」『複言語・多言語教育研究』7, 76-94.
- 鈴木ひろみ・大宅利美（2022）「中国語授業へのGWT導入の試み—中国語タスクでフロー体験」

- 『中央大学論集』43, 51-63.
- 武井勇樹（2022）『60分でわかる！メタバース超入門』技術評論社.
- 単艾婷（2022）『中国 ことばの世界を旅する — 陈湛《冰箱里的企鹅》』朝日出版社.
- 単艾婷（2024）「四技能の有機的連携を目指したオーセンティック中国語学習 — テキスト『中国 ことばの世界を旅する』を用いた事例研究』『東アジア言語文化研究』7, 1-11.
- 単艾婷（2025）『游中国 一度は行ってみたい絶景12選 — 王全民主編《100个地方畅游通》より』朝日出版社.
- チャン キイ フォン・重枝豊（1997）『チャンバ遺跡 — 海に向かって立つ』連合出版.
- 陳慶光（2022）「スポーツツーリズム」高橋徹（編）『スポーツ文化論』みらい, 180-193.
- 陳慶光（2023）「リアルとバーチャルが紡ぐオンラインマラソン」『RT』2, 32-39.
- 辻野裕紀（2017）「試論：言語教育にとって文化とは何か」『言語科学』52, 61-73.
- 寺本潔・澤達大（編著）（2016）『観光教育への招待 — 社会科から地域人材育成まで』ミネルヴァ書房.
- 内閣府「Society 5.0」『内閣府の政策』https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html（2025.09.26 閲覧）
- NAO（2024）「異文化の間で躍動するチベットの作家達」『連載「時の音」 — “時代が鳴らす音”に耳を傾ける』<https://tokion.jp/2024/02/24/the-world-of-tibetan-writers/>
- 日本語パートナーズ事業部（2021）「東南アジア文学のこれから — 書き手と読み手をつなぐ」『次世代共創パートナーシップ — 文化のWA2.0』<https://asiawa.jp/culture/features/f-yomuround-table-talk-1/>
- 日本スポーツツーリズム推進機構（編）（2022）『実践 スポーツツーリズム — 組織運営・事業開発・人材育成』学芸出版社.
- 根岸海馬（2025）「モビリティーズ研究の展開とアプローチ」『立命館大学人文科学研究所紀要』142, 33-57.
- 野原祐吉（2010）『ゾンビ・サーガ — ジョージ・A・ロメロの黙示録』ABC出版.
- 平野健一郎（編）（1984）『国際関係論のフロンティア（2）近代日本とアジア — 文化の交流と摩擦』東京大学出版会.
- 馮富榮・王俊・チョウケイニ・蘇雪蓮・董梅香（2021）「オンラインによる中国語教育の試み（その1） — より高い学習効果を目指して」『愛知淑徳大学論集：交流文化学部篇』11, 29-40.
- 藤垣裕子（1995）「学際研究遂行の障害と知識の統合 — 異分野コミュニケーション障害を中心として」『研究 技術 計画』10（1/2）, 73-83.
- 星泉・海老原志穂・南太加・別所裕介・岩田啓介・山口哲由・平田昌弘（2020）『チベット牧畜文化ポータル』<https://nomadic.aa-ken.jp>
- 星泉・岩田啓介・平田昌弘・別所裕介・山口哲由・海老原志穂（2021）「チベット・ヒマラヤ牧

- 畜農耕資源データベースの構築—フィールドデータと文献データをつなぐ』『デジタルアーカイブ学会誌』5 (S3), S164-S167.
- 星泉・岩田啓介・平田昌弘・別所裕介・山口哲由・海老原志穂 (2022) 「失われゆく牧畜文化を
活写するための「フィールド・アーカイビング」—『チベット牧畜文化辞典』編纂の経験から」
『デジタルアーカイブ学会誌』6 (S3), S198-S201.
- 薬師寺浩之 (2022) 「観光研究におけるネットノグラフィー調査の可能性」『立命館大学人文科学
研究所紀要』131, 181-214.
- 山下晋司 (編著) (1996) 『観光人類学』新曜社.
- 山下晋司 (編著) (2011) 『観光学キーワード』有斐閣.
- 山中速人 (1992) 『イメージの楽園—観光ハワイの文化史』筑摩書房.
- 山本忠行 (2025) 「行動中心アプローチに基づく学習言語能力育成をめぐる—内容と言語の統
合を目指して」『通信教育部論集』28, 46-65.
- 横倉真弥 (2022) 「異文化コミュニケーションとしての日本語教育」『岐阜協立大学論集』55(3),
21-35.
- ラシャムジャ (著) ; 星泉 (訳) (2022) 「最後の羊飼い」『路上の陽光』書肆侃侃房, 155-209.
- 雷达 (2010) 《新世纪十年中国文学的走势》《文艺争鸣》3, 6-12.
- Bennett, M. J. (1986). A developmental approach to training for intercultural sensitivity.
International Journal of Intercultural Relations, 10(2), 179-196.
- Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Bristol:
Multilingual Matters.
- Cresswell, T. (2006). *On the Move: Mobility in the Modern Western World*. London: Routledge.
- Graburn, N. H. H. (1977). Tourism: The sacred journey, In Smith V. L. (Eds.) *Hosts and guests:
the anthropology of tourism*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 17-32.
- Hall, E. T. (1966). *The hidden dimension*. New York: Anchor books.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond culture*. New York: Doubleday.
- Hannam, K., Sheller, M., Urry, J. (2006). Mobilities, immobilities and moorings. *Mobilities*, 1
(1), 1-22.
- Kitahara, Y., Nishiyama, D., Ohno, M., Yamamoto, Y., Kuwahara, Y., Hatakeyama, T. (2021).
Construction of new archaeointensity reference curve for East Asia from 200 CE to 1100
CE. *Physics of the Earth and Planetary Interiors*, 310.
- Livingstone, D. N. (2003). *Putting science in its place: Geographies of scientific knowledge*.
Chicago: The University of Chicago Press.
- MacCannell, D. (1976). *The tourist: A new theory of the leisure class*. New York: Schocken
Books.

- Stewart, G. (2007). *Framed Time: Toward a Postfilmic Cinema*. Chicago: University of Chicago Press.
- Sugie, S. (2024). Exploration of an integrated instructional design for tourism, cross-cultural understanding, and foreign language education using new technologies. *CATS*, 18(12), 122-133.
- Urry, J. (1990). *The tourist gaze: Leisure and travel in contemporary societies*. California: Sage Publishing.
- Urry, J. (2007). *Mobilities*. Cambridge: Polity Press.

付記：本研究は JSPS 科研費 22K13171 (「読書活動とコミュニケーション活動の統合による新たな中国語教授法の構築」) の研究成果の一部である。

附録 研究集会ポスター

科 研 費 研 究 集 会
(Zoom ハイ ス リ ッ ド 開 催)

参加登録はこちらから 

ことばと旅

異文化コミュニケーションへの新たな視座を求めて

日時： 2025年3月4日(火曜日) 13:30～17:30
会場： 公立小松大学 中央キャンパス 305・306室

「異なる言語に触れること」「異なる世界を見つめること」
そして「さまざまな場所を旅して、さまざまな人々と出会うこと」
言語教育、観光研究、文化研究、フィールドワークなど、多様な視点から
(ことば)と(場所経験)と(異文化コミュニケーション)の関係性と創造性について考える。

プログラム

13:30～13:40	趣旨説明
13:40～14:05	「旅をテーマとしたオーセンティック中国語教材の開発と実践 —— 場所を媒介とする言語・文化理解の試み」 公立小松大学 単艾婷
14:05～14:45	「バーチャルトラベルを通じて旅行体験を共創する中国語教育のデザイン」 北海道大学 杉江聡子 (★招待講演 1)
14:45～15:25	「語りの記録を通じてチベットを経験する —— 翻訳とフィールド・アーカイビングの試み」 東京外国語大学 星泉 (★招待講演 2)
15:35～16:00	「ゼロ初級者のベトナム経験 —— 専門知の翻訳・融合・ローカル化」 高知大学 北原優
16:00～16:25	「Go West —— ホラー映画とアメリカの歴史」 公立小松大学 小原文衛
16:25～16:50	「SNSにおけるコミュニケーションから見たスポーツツーリズムの変容」 公立小松大学 陳慶光
17:00～17:30	全体議論・質疑応答

スペシャルゲスト1

杉江聡子 氏

北海道大学人文学部・准教授。観光教育や異文化教育に関する研究とともに、ICTやPBLなどの多様な手法による中国語教育環境のデザインに取り組んでいる。主要論文に「観光教育とマルチメディア表現の学びに基づくPBLによる国際協同学習」(2023)などがある。



スペシャルゲスト2

星 泉 氏

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授。チベット語研究のかたわら、チベットの文学や映画の紹介活動を行っている。『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』編集長。訳書にツェリン・ヤンキー『花と夢』、ラシャムジャ『路上の陽光』『雪を待つ』などがある。





テキスト 『中国 ことばの世界を旅する 2 一王全民 主編 <<100 个地方畅游通>>』
単艾婷 編著、朝日出版社より2025年1月刊行

本書は、中国国内で実際に出版されている旅行ガイドブックを題材とした中上級向け中国語テキストです。中国には数多くの美しい景勝地が存在し、多くの人々にインスピレーションを与え続けてきました。本書では紀行文を読むことを通じて中国の多彩な文化へと意識を向けるきっかけとするとともに、インストとアウトストの有機的連携による中国語運用能力の総合的強化を目指します。

■ 主催：公立小松大学国際文化交流学部 単艾婷 / お問い合わせ先：toiawase211127@gmail.com
■ 協力：朝日出版社 ※ 本研究集会は、科研費(若手研究 22K13171)により助成を受けています。